昔話の語りを通して異世代交流を考える

美谷島（びやじま） いく子
Ikuko BIYAJIMA

はじめに

昔話は、子どもをひきつける強い力を持っており、子どもが生きていくうえでとても重要なものである。ブルーノ・ベッテルハイムは『昔話の魔力』のなかで次のように述べている。「昔話は、子どもの無意識に語りかけ、子どもが無意識のうちに抱いている不安を和らげ、子どもを勇気づけて、人生に立ち向かう力を与える。だから子どもにとって非常に大切なものだ。」（注１）

昔は、昔話は高齢者により孫に囲炉裏端で語られていた。

最近は、『～の昔話』として地域毎の昔話が採集されることはあっても、数十年前まであった高齢者が孫に「昔話を語る」ということは、核家族化やTVの普及により、ほとんど行われていない。「現代の子どもたちは、広がりを持った家族や、よく調和の取れた共同社会に保護されて育っていない。したがって昔話の価値は、それらが語られ始めた昔よりも、現代の方がずっと大きくなっている。」（注１）

そんな中、高齢者が昔話を子どもに語ることが、人々によって尊敬を持って受けとめられている地方文化があることを知った。福島県会津で昔話を子どもに語っている高齢者グループを訪ね、高齢者がどのように昔話を子どもに語っているのかを調査し、人間として尊厳のある生き方に昔話を語ることが果たす役割や、異世代交流について考察したい。

観察調査の方法と結果

平成14年の夏休みに、福島県会津の昔話を語る高齢者を訪ね、地域に根付いている昔話の語りの実演を観察調査した。

Ⅰ．横山幸子さんによる昔話の語り

平成14年７月27日土曜日午後１時～

福島県立会津若松市城東にある、福岡県立博物館、体験学習室で

畳の部屋で囲炉裏の端に座り、子どもと大人を対象に、上っ張りにおそろいの模様のもんぺ姿で語る。(写真１)

横山幸子さんは、東京生まれ東京育ちでこの７月11日で71歳。白百合高女出身。疎開で梁川町に転居。遊ばせ言葉だったので地元の人にからかわれたこともある。20年間昔話を語り続け2000年に久留島武彦賞受賞。昔話の語りのCD『福島むかしばなし』も出している。

「七夕の笹飾りの由来」

福島県　岩城の昔話

「正直ぜんべい」

「ミンミンぜみ」

別の場所で前に横山さんがこの昔話を語るのを聞いた幼稚園の男の子が「せみがかわいそうだからお花をあげれば。」と言う。女の子は「せみになったおにいちゃんが、かわいそうだという。」このあいだの台風のニュースを見て、子どもたちは知識はばっちり持っているが痛みは胸に届かないらしく「西川峰子の家は流れたが、おらえは大丈夫。ミサワホームだから。」と言った。

「小豆まんまの歌」

「寿命」

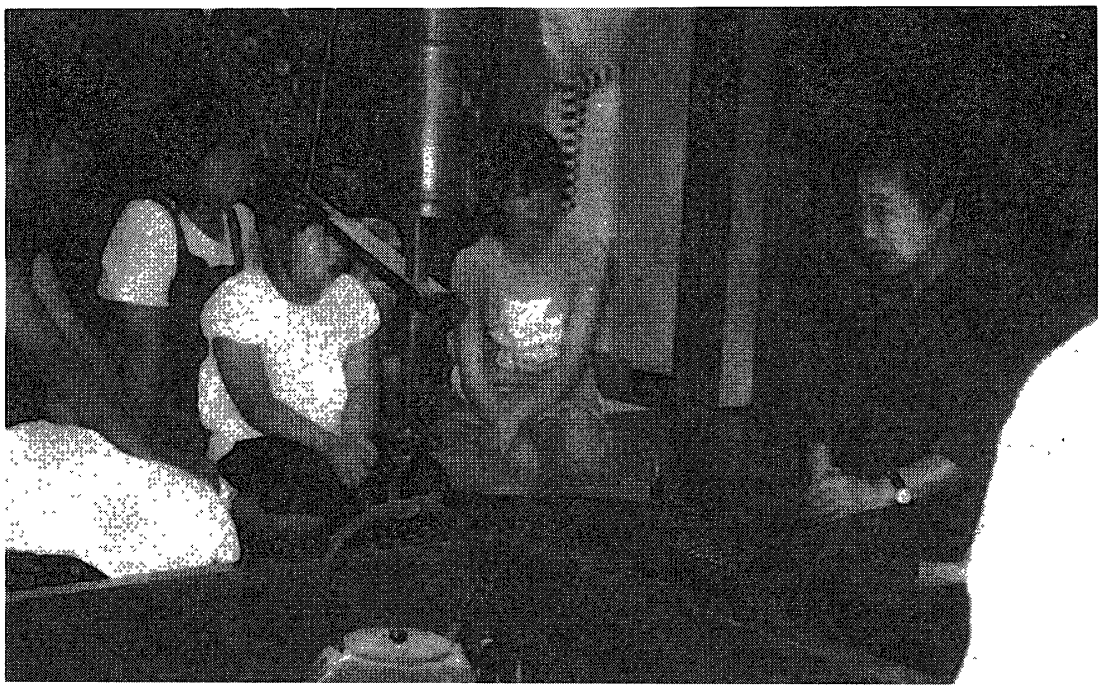
横山さんは65歳から高齢者は「幸齢者」であると解釈して自分の思いどうりに生きたい。

「かっこ（下駄)」

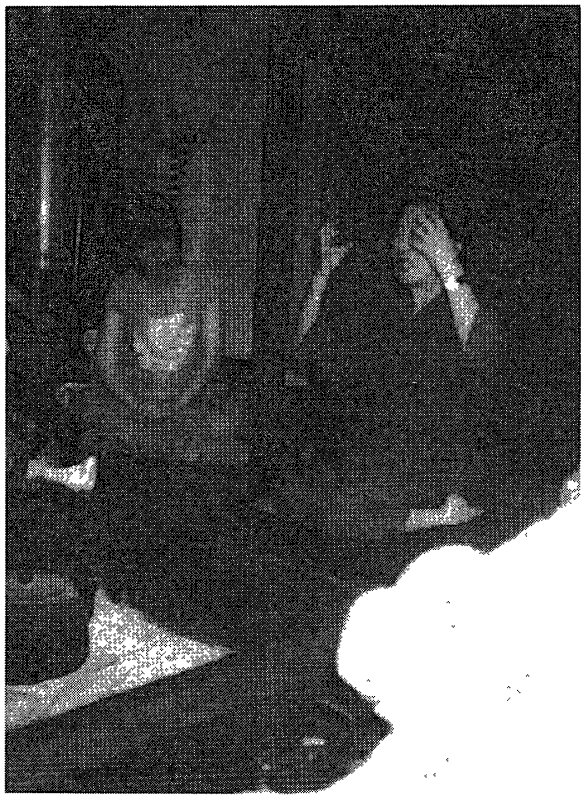
新しい履物をおろすとき縁起が悪いので昼からはおろさない。紀宮様に語ったこともある話。

横山さんの語りは泣き節（写真２）で悲しい話が多かった。昔話の間に入れて語った言葉が横山さんの生き方を表わしていて印象的であった。

六っの昔話を語り終わり、洋服に着替えられた後に横山さんにお話をお聞きすると、笑顔で答えてくれた（写真３)。横山さんは、同じ方法で午前10時30分からも「昔話の語り」をしている。



（写真１）語り



（写真２）泣き節

（写真３）笑顔

横山さんが、横山さんの言葉で昔話を語っている間、そこに、昔話の世界が存在し、終ると消えてしまう。近くで聞いている子どもも、横山さんの息使い、身体の動き、語りのリズムや節を感じとり、昔話の世界を共有できる。

Ⅱ．下郷町老人クラブの方々による昔話の語り

平成14年７月28日日曜日午後７時～

福島県南会津郡下郷町大内宿　民宿伊勢屋の囲炉裏端で

大内宿は江戸時代の下野街道（地図１参照）宿場町の町並みが残されており、茅葺き屋根、アスファルトの道路をはがし土の道に戻した（写真４）。囲炉裏の火を囲みお茶を飲みながら、私達は昔話を聞かせてもらった。途中８時頃に「火の用心、火の用心。」と子どもたちが家々を回る声が聞こえる。下郷町は現在人口7500人、20年前は１万2000人だった。１年間に100人生まれ100人の人が死ぬ。そして、町を出て行く人が300人と言われていた。民宿の食卓には岩魚、山菜（ぜんまい、わらび、ふき、こごみ）、木の実（栃、くるみ）、荏胡麻、五穀が並び稲作のみの単一文化ではなく、縄文以来の豊かな山村文化が残っている所である。

次の９人の方々が伊勢屋に集まって来て下さった。

玉川あや子（75歳）昔小学校の教師。孫と同居で、三世代６人で生活している。

室井　八郎（78歳）百姓。「ざっと昔の会」会員

佐藤　つね（85歳）大松川在住。山の中で野菜を作っている。文庫もしている。

渡辺　あき（66歳）着物姿。田島町生まれ。下郷に来て裁縫の先生。

佐藤　純子　　母つねを車で送ってきた。

室井むつ子（73歳）会津若松大都から下里に嫁ついできた。子どもは独立。

佐藤　純江　この会の代表。下郷生まれ。中学校の教師をしていたが辞めた。農家に育ち、煙草の葉をのすのを囲炉裏を囲んで手伝ったとき、毎晩大人が子どもが眠くならないように昔話を聞かせてくれた。最近、各町村に民話を採集に行き民話集を編む仕事をしたが、どの昔話をとるか、取捨選択に迷った。子どもの頃話してもらった昔話については、すっぽり抜けていたが、今になって昔話が蘇ってきた。昔話の語りは苦手である。

田村　みい　幼稚園の先生。ボランティア一筋で昔話を語っている。伊勢屋と親戚。

室井ひろし　大工。下郷の山の中の大蔵で兎や鶏を飼い、コスモスや丹波栗を作っている。室井むつ子の夫。写真撮影をしてくれる。

この中の４人の方が昔話を語って下さった。

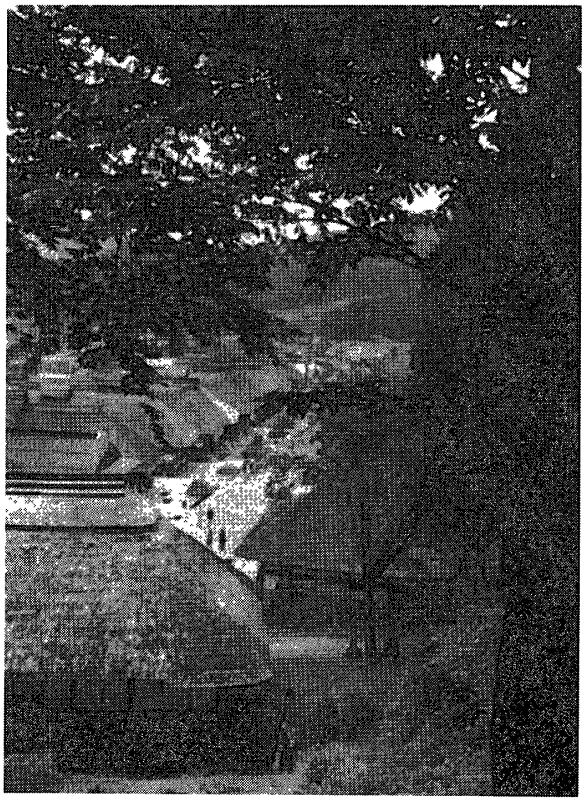
田村　みい「えんぞうとかし」（写真５）

佐藤　つね「嫁の屁」

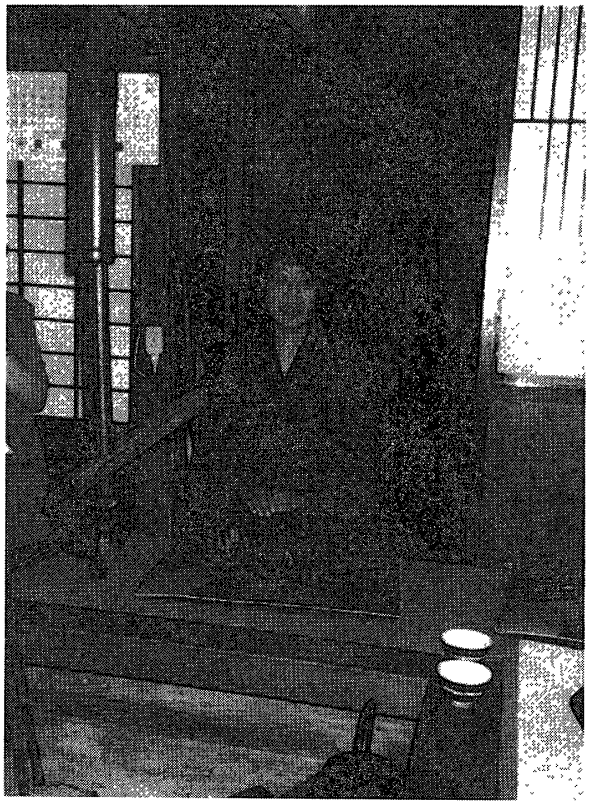
室井　八郎「茶売り金三郎」（写真６）

玉川あやこ「嫁と姑」　孫は方言が分からない。この話は最近本から仕入れた。嫁と同居

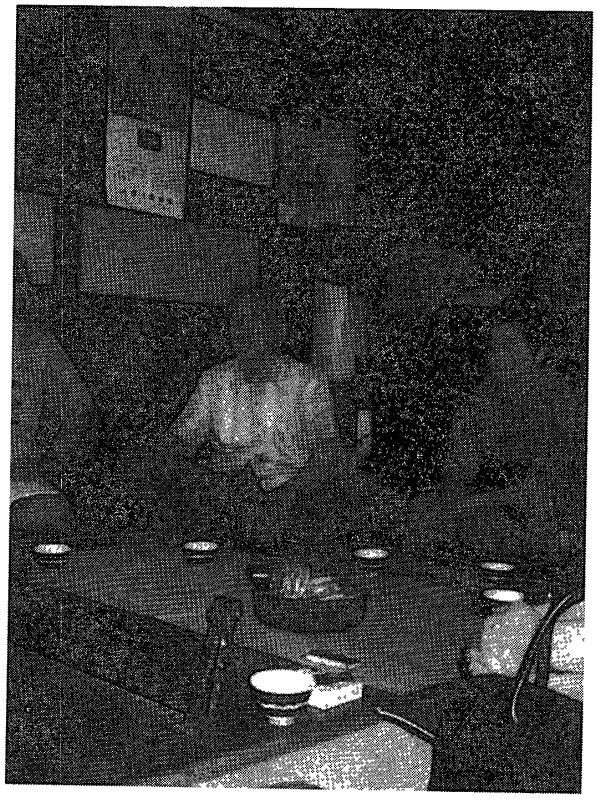
しているので複雑な気持である。自分への戒めのような気持で語った（写真７）。



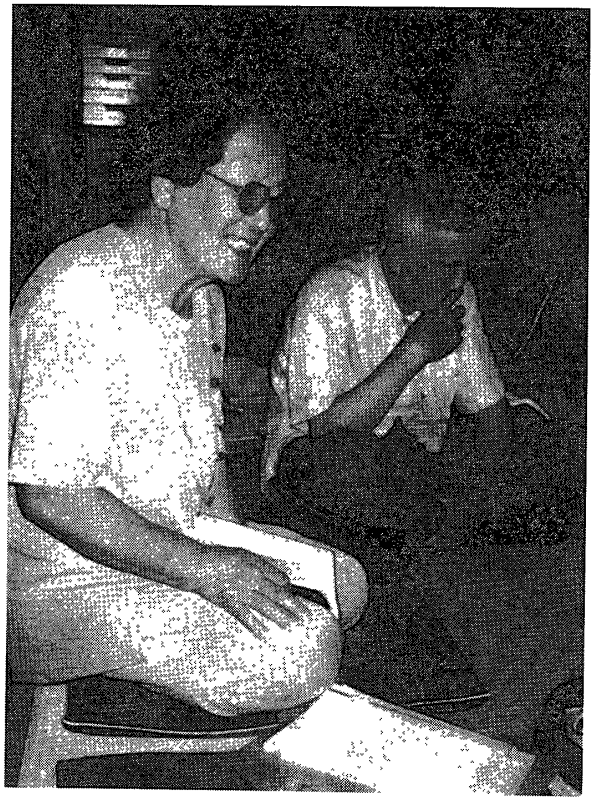
（写真４）



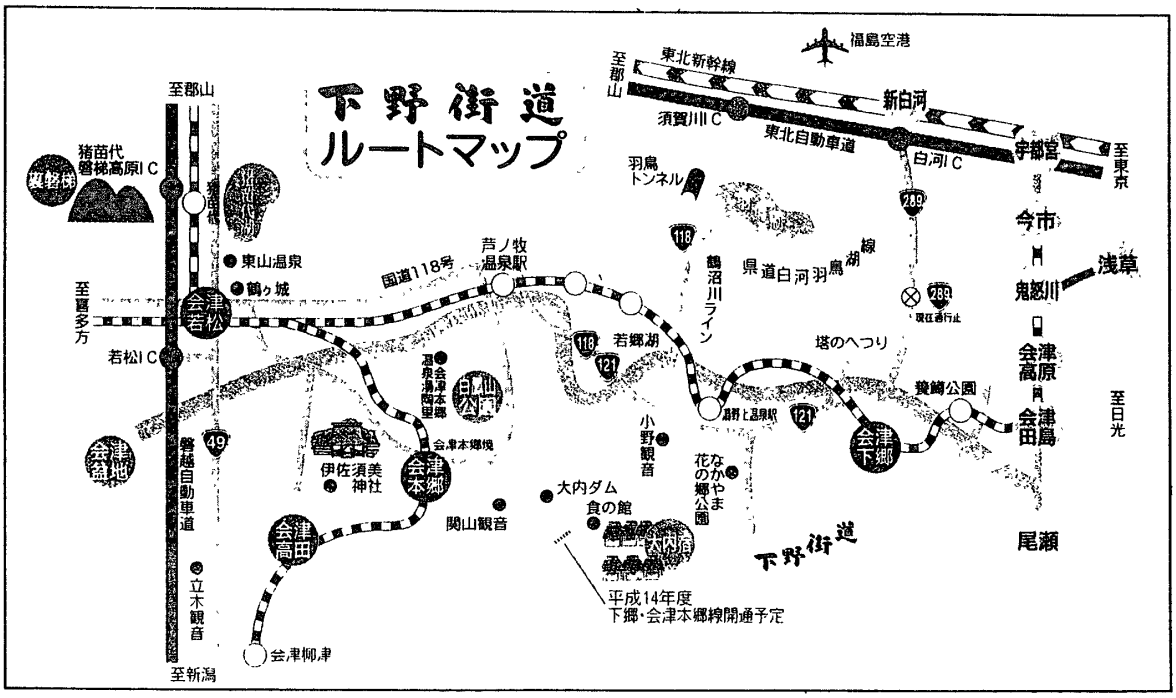
（写真５）



（写真６）



（写真７）



地図１　下野街道ルートマップ

語って下さった４人の方は全員70歳過ぎである。４人の語りの後に、みんなから昔話を語ることについて話を聞いた。

今語った昔話は、夜、煙草の葉のしを手伝っている時や、膝の上で、頭の虱をとってもらいながら語ってもらったものである。子ども達は、最近、方言を理解できるが自分の口からは語れなくなっている。昔話を語ってくれた方々は、今まで方言は恥ずかしいという思いがあったが、子ども達に、この土地独特の豊かな言葉である方言を昔話を通じて伝えたいと思っている。

この会は、昨年「語り部スクール」（平成13年）養成講座が終わっても別れてしまうのはもったいないから勉強を続けようと、下郷町の昔話研修会ができた。１年前から、月に１回勉強会を開いている。南会津地方老人クラブ連合会で南会津地方に伝わる昔話の代表的なものを集め、南会津地方振興局のサポート事業の一つに加えてもらい『南会津地方のざっと昔』として平成13年３月に出版している。

さらに、平成14年３月に、南会津地方老人クラブ連合会は、『南会津地方のざっと昔』を語っている姿を２本のビデオに撮影した。

調査旅行から帰って

平成14年10月11日に、佐藤純江さんから書籍『南会津地方のざっと昔』とビデオ２本が送ら

れてきた。

1．『南会津のざっと昔』を読んで分かったこと

平成13年7月7日から9月30日まで、福島県うつくしま未来博が開催されることになり、未来博のパビリオンのひとつに「からくり民話茶屋」が設けられることになった。

『からくり民話茶屋記録誌ぬくもりの記憶』（注2）によると、からくり民話茶屋のプレイベントとして「ふれあい民話の集い」と「語り部スクール」が企画された。「ふれあい民話の集い」は、県民の参加を促進するために、伝承語り部（横山幸子さんもその一人）による民話オン・ステージと、ふれあいトーク「何故未来博に民話があるの？」が開催された。「語り部スクール」は、福島県の7箇所で5回ずつ開設され、語り部を養成した。

2．『南会津のざっと昔』のビデオを見て分かったこと

ビデオの内容

高齢者が、昔話を、子ども達や老人に保育所、小学校、町民体育館、老人保健センターで、生き生きと語っている（注8）。語っている昔話は次のようである。

ビデオ1．南会津の語り部『南会津のざっと昔』①　南会津東部（地図2参照）

語り手	出身地	昔話名	場　所
A．湯田　与作	田島町	「夢昔」	田島町民体育館
B．湯田　淑子	〃	「雪女」	〃
C．渡部　　忠	〃	「孫娘」	〃
D．渡部　　許	〃	「天狗と孝行息子」	〃
E．星　シゲノ	〃	「鬼ばばと太郎」	〃
F．佐藤　和子	下郷町	「かがみの沼の主」	下郷町旭田小学校
G．室井　八郎	〃	「茶売り金太郎」	下郷保育所
H．佐藤　ツネ	〃	「狸と狐の知恵比べ」	〃

昔話を語る前後の言葉

A．はりうの与作じいやです。げんべいづくりやりながらやると調子でるが、今日はげんべいづくりやらないから調子でるかどうか。

B．こんにちは。紺屋の淑子です。生涯学習のひとつとしても、皆さんの前で勉強させていただきたいのでよろしく。

D．民話は方言が基準とされているようですので、たっぷりの方言を入れて語りたいと思います。

E．一杯いい出会いがありました。昔話のおかげで、よその郡から一杯来ている人達が、皆、村興しに、「民話と方言の会」（NPO）で勉強しています。こんな機会ができたことをうれしく思います。みなさんも一人でも多く参加できることをお願いして今日は頑張ってしゃべります。

F．昔話に出てくる、なぐら沢について２枚の写真　①　紅葉の沼　②　石の祠「おせんが宮」を子どもに見せて説明する。この伝説は、５年生のひろよしくんのお父さんが作ったこの町史からとっています。

ビデオ２．南会津の語り部『南会津のざっと昔』　②　南会津西部（地図２参照）

語り手	出身地	昔話名	場　所
Ｉ．星　フキ子	舘岩村	「貧乏神と福の神」	老人保健センター
Ｊ．馬場マス子	伊南村	「姨捨て山」	伊南村保育所
Ｋ．五十嵐千佐美	南郷村	「雪女」	山口保育所
Ｌ．馬場　雅延	〃	「瓜姫とあまんじゃく」	〃
Ｍ．梁取源左エ門	〃	「猿昔」	只見町保育所
Ｎ．五十嵐ナツミ	只見町	「鷲にさらわれた子ども」	〃
Ｏ．馬場　タニ	〃	「古屋のむる」	
	〃	「猫の恩返し」	

昔話を語る前後の言葉

Ｉ．皆さんおもしれいかな。（話の後で）良かった。

Ｊ．老人会からのみなさんへのプレゼントがありますので、後で先生からもらってください。

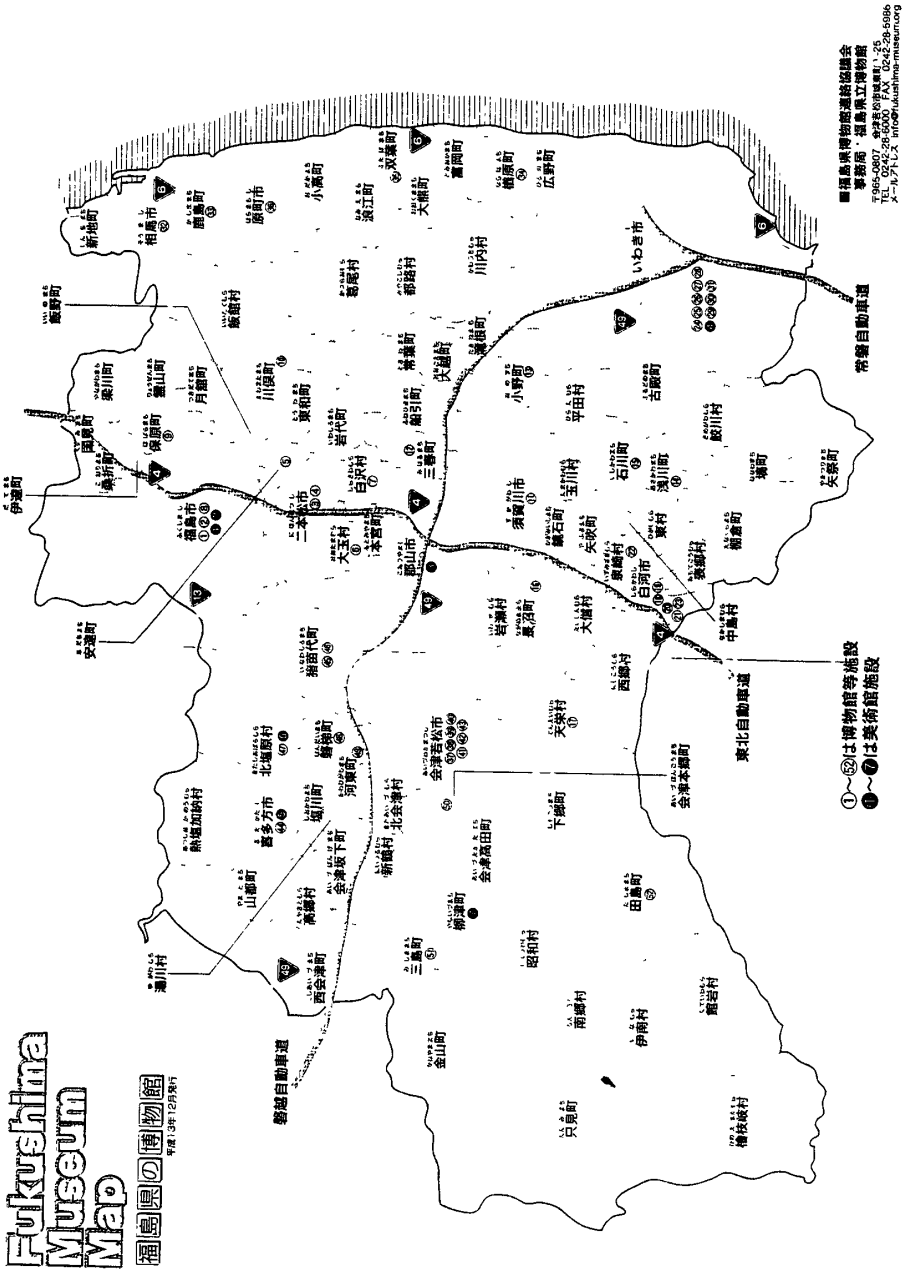
Ｋ．山口保育所と富田保育所の人も聞きに来てくれて、遠い所からありがとね。（笑顔で）私を見たことある人あるかもね。今日の話は先生からみせてもらった、幼稚園のビデオと少し違うところがあるかもね。

Ｌ．このじいさま知ってる人？「はーい」（子ども達）。紺屋のじさま。

Ｍ．（きせるを手にもって）こうして囲炉裏から火をとって、そして子ども達は囲炉裏端に集まって昔を聞いた。または炬燵なぁ。昔は電気がなかったからこういう灯り（ランプ）のそばでなぁ。それから、さげるランプもあった、ぶらっとさげる昔のランプ見たことないかなぁ。じいちゃん、ばあちゃん持ってる人あるかも。そういうの持っている家あるとおもうがなぁ。これつけとくかなぁ、そういうことをあかして昔話を聞いたものだ。楽しみでなぁ。昔を聞いた。学校生徒あたりまで聞かしたものだ。

N，どうもありがとう、皆どう思った？（話の後）

7月の観察調査では、下郷老人クラブの方々には場を設定して私達に語ってもらったため、高齢者が子どもたちにどのように語っているかは、見ることができなかった。しかし、2本のビデオをとうして、地元の保育所・小学校で地域の子どもの前に立った、語り手である高齢者は、昔話を語る前後に、子どもへの思いを言葉に託し、服装や持ち物等で様々な工夫をしていることが分かった。



地図2　Fukushima　Museum　Map

考察

会津の高齢者は、子どもに「昔話を語る」ことを生きがいとしていることが、観察調査や次の言葉により分かった。

星シゲノのことば「初めてお会いする語り部さんたちと楽しく交流できました。とてもいい社会勉強になりました。」（注２）

湯田与作のことば「お客様が予想以上に多くびっくりした。民話を聞く方がこんなにいるのはとてもうれしい。」（注２）

馬場雅延のことば　「一生に一度の想い出ができて。とてもうれしいです。これからも頑張りたいと思います。」（注２）

「何故、子どもに昔話を語ることが高齢者の生きがいなのか」

昔話は、会津の歴史や風土に育まれた地域文化、伝統文化、生活文化の凝縮されたものであり、「昔話を語る」ことは、自分達が先人から受け継いだ文化を、21世紀へ伝承してゆくことに他ならないから。

今、高齢者が昔話を語ることを通して、会津の心の文化を子どもへ語り伝えるという異世代交流を続けることの中にこそ、未来があると考えられるから。

「何故、福島にこのような昔話を語る地方文化があるのか、また高齢者は、昔話の語りをどのように学んできたのか」

1．元々会津は、雪深く昔話が多くあり、冬の夜昔話を語る伝統があった。子どもの頃、囲炉裏端で煙草の葉のしや、虱とりのときに話してもらっていた昔話が蘇ってきた。
2．うつくしま未来博のプレイベントの「語り部スクール」養成講座（全５回）で学んだことにより、力を付け、蘇ってきた昔話を、語ることが出来るようになってきた。
3．未来博の「からくり民話茶屋」で、昔話を勢力的に生き生きと語った（注８）後も、研修会をつくり勉強を続け、2002年８月にはＮＰＯ「民話と方言の会」の認定を受けた。

「会津の高齢者は、昔話をどのように子どもたちに伝えようとしてきたか」

1．保育園、幼稚園、小学校において子どもの集団に昼間マイクで語る。（こちらが大部分）
2．家庭で自分の孫に個人的に夜、語る。（三世代同居の家庭のみ）
斉藤さやか（小学６年生）は、祖父の昔話を聞いて覚え、子ども語り部になった。このような異世代交流が生まれている。

「昔、昔話はどのように語られていたであろうか」

1．岩手県遠野　語り部　阿部ヤエさん（68歳）

「観光客に昔話や、わらべうたを伝えてきたが、本当は昔話は囲炉裏端でひそひそ話すもの。大勢を相手に話すものではなかった。」（注3）

2．岩手県五戸　野田太郎・多代子夫妻

「昔の語り方には一つの約束があって、昔は夜語るもので昼語ると鼠に笑われるということでその時は必ずにゃごうと猫のまねをしなければならないと言った。昔話の語られるにのは、どんな時が多いかというと、寒い日の四、五人の子どものつどいに、火を囲んで家の年寄りが語って呉れることが常ではあるが、家の赤ん坊がようやく足が立ってヨチヨチと歩くようになり、手足が氷のようにつめたくなったりすれば、祖母や、姉たちが抱えて炉の辺りに坐り、焚火で温めてやったり、炬燵の中に入って、さあさあむかし教えるからとか、桃太郎のむかしとかいって、昔話にきをまぎらかして、「むかしァ、あったじょんなァ」と語り出せば「はぁ」と合槌を打つことをおぼえさせ、それから甘い桃が川から流れてくるのに興味をそそり、次に「うまい桃こァ、こっちゃァ来い」とうたってやり、「大けぃ桃こだ、うまそだ桃こだ」と、子から注意を引くようにして、温めながら語ってやる。後には子らも次々に文句を覚え、その中に自分から歌ったり、手を振ったりして桃を招く動作をするようになるのであった。」（注4）

3．南会津の梁取源左エ門のことば（P56参照）

下郷町の高齢者にきいたり、又この3例から分かるように、昔、昔話は夜静かな時間の中で囲炉裏の火を囲み、親しい高齢者によって語られ、子どもも心を寄せ合って聞き、合槌を打って参加した。語る高齢者は、手を動かしよなべをしながら、自分の孫に自分の言葉で自分の生き方を、昔話を通して語り、聞く子どもも、それを手伝いながら聞くことが多かった。語る高齢者と聞く子どもの距離が近いので高齢者は子どもの様子がわかり、子どもも語る人の息使いやリズムを感じ取り、昔話の世界を共有できた。

今、昼間、集団で、生の声でなくマイクをとうして、知らない人から聞く昔話の語りが、子どもの心にどのように響き残るかを明らかにするのが、残された課題である。

又、最近、玉川あやこさんの例（P52参照）のように、語る昔話を、本から仕入れる人も多くなっている。昔話の再話本や昔話絵本を通しての異世代交流のあり方も研究してゆきたい。

終わりに

ドイツの昔話は、イルマ・ヒルデブラントによれば母から娘へ語り継がれていた。それ故、グリム兄弟が昔話を採集したのはマリー・ハッセンブルーク、ドルトヒェン・ビルトやカタリーナ・フィーマン等の女性たちからであった。

日本ではどうであろうか。福島の伝承語り部66人中、男性は 6 人。語り部スクール出身の語り部は160人中男性は13人で、女性の方が多かった。男性は野外労働が多く、女性が子育てを分担することが多いからであろう。昔話を語っている女性で長寿の方が多かった。

絵本作家エルサ・ベスコフ（1874－1953）は、母方の祖母から幼いとき聞いた昔話を元に、最初の絵本 “Sagan Om den Lilla Lilla Gumman”『ちいさなちいさなおばあちゃん』を1897年に描いた。この絵本が彼女の33冊の絵本の出発点となったのである。

彼女は幼い頃、伝承文芸（口承文芸）を祖母や父母、おじ、おばから聞いて育ったと回想している。今後、そのことが絵本作品にどのような影響を与えたか調べてゆきたい。

参考文献

(1)『昔話の魔力』ブルーノ・ベッテルハイム著、波多野完治、乾侑美子共訳　評論社、昭和55年

(2)『からくり民話茶屋ぬくもりの記憶』うつくしま未来博協会企画室、コア編集製作、2002年３月20日

(3)『民話の里、思い複雑』朝日新聞、2002年11月28日

(4)『手っきり姉さま』能田多代子編、未来社、1958年

(5) “Elsa Beskow En BIOGRAFI”、Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 1958

(6) “Sol-ägget Fantasi och Verklighet i Elsa Beskows Konst” Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 2002

(7)『昔話の話法』小沢俊夫著、福音館書店、1999年

(8)高齢者が昔の思い出や昔話を語ることで、脳の活性化や情緒を安定させるという「回想法」が、最近、注目されている。

○本研究は、H14年度学術研究振興資金により、観察調査をしたものである。

会津大学図書館司書の藤津麻里さんにお世話になった。記してお礼申しあげる。